

喜びの主のご降誕を迎えた私たちは、1月6日までの間、主のご降誕の、一連の物語より学ぶことになっております。マタイによる福音書では、主イエスの誕生がこの世的には誰にも理解されることのない出来事であり、ヨセフもマリヤも命がけで主イエス・キリストをこの世に誕生させる使命を果たしたこと、その誕生が知らされたのは、当のユダヤ人ではなく、東の国の博士だったことを記しております。マタイはこの福音書をユダヤ人のために書きましたが、当時ユダヤ人たちは主イエスを救い主とは認めませんでした。そして今日に至るまで認めていないのです。マタイは、東の国の博士達に主イエスの誕生が知らされたと書きながら、ユダヤの人々に反省を促し、主イエスを救い主として受け入れ信じさせようとしたのでした。マタイのこの願いは、今日までまだかなえられておりません。私たちはそのことを覚えて、毎年受苦日にエルサレム教区のために祈り、信施をささげますが、それはマタイの願いが私たちの願いでもあることを示しております。

さて、その後クリスマスの物語の中で最も悲しい幼子の物語が続きます。ヘロデ王は博士たちから、主イエスがユダヤ人の王として生まれたと聞いて、この存在は自分の命を危うくするものだと考えたのでした。当時王が変わるといえるのは、自分が死ぬ以外にはありえなかったのです。こうしてヘロデ王はベツレヘム付近の二歳以下の男の子をことごとく殺したのでした。将来のある、幼子達が殺されたのは断じて許されることのないヘロデの罪ですが、この物語から私たちは、人間的なあらゆる手段をもってしても、神をなきものにすることは出来ない。神に出来ないことは何もないことを知るのです。

そして主イエスは、この世の両親と共にナザレに行き、三十歳になられるまで、過ごされることになったのです。ナザレは母マリヤが受胎を告知された場所でした。従ってヨセフにとってもマリヤにとっても住み慣れた場所だったのです。今日ナザレに行きますと、マリヤの受胎告知を記念する教会がたち、主イエス一家が住んだと言われる洞穴があるそうです。そしてマリヤの泉と名が付けられた泉があり、マリヤは日々ここから水を汲んだと言われております。このようにナザレは主イエスの、この世の成長の舞台でありました。ナザレの主イエスの生活は聖書にほとんど記されていませんが、この世の父ヨセフの仕事であった大工を手伝い、ヨセフの死後は自ら大工をして家族を支えておられました。そして聖書をよく読まれ、祈りをよくなさっておられたようです。

主イエスも実は、誕生後間もなく救い主としての活動を始められたのではなく、長い準備の期間をお過ごしになり、父や母によく仕えておられたのです。主イエスのような成長される必要のない、学ぶ必要のない方が、このように学ばれ、長期間を過ごされたのは、私たちへの信仰生活の模範を示されたのに他なりません。また父母に仕えることを通して、教会という一つの家族においての正しい在り方を自らお示しになられたのです。私たちが教会で主なる神の家族として信仰生活を過ごすとき、主イエスが両親によくお仕えになったことは大切な指針でありましょう。

主イエスが育たれたナザレは、本日の福音書の最後から、預言者が登場するにふさわしい、由緒ある町だと思われる方もおられると思いますが、実はそうではなく、全く反対なのです。後日主イエスの弟子に選ばれたバルトロマイ、別名をナタナエルという人は、主イエスがナザレ出身と聞いて、「ナザレから何のよいものが出ようか」と言いました。また聖書の別の箇所では、学者の人が「ナザレから預言者が出ることはない」と言っております。ナザレはこのように、救い主が出るのにふさわしくない、また他の町から差別を受けていた町だったのです。こう考えますと、主イエスが伝道を開始されるまでナザレで過ごされたというのは、とても重要なことだったのです。世の救い主は、この世的には価値のない、人に喜ばれもせず、むしろさげすまれる中にお生まれになりました。そして過ごされた場所も、人々から尊敬されず、この世的には価値のおかれない場所でした。そのようなところにお生まれになり、育たれたのは、この世で最も苦しんでいる人や、救いを必要としている人々に、解放を告げるためだったのです。主イエスのこの使命は、その誕生から、そして成長にもよく現われておりました。

1月6日から顕現節に入ります。私たちは主イエスのご降誕物語をよく心に納めて、それがこの世的には価値のない、人々から評価されることのない出来事だったけれども、主なる神の偉大なご計画の業であったことを、心に刻みたいものと思います。顕現節は、この世に現された主なる神の偉大な御業を振り返り、私たちの信仰を確かなものにする一時であります。